

# 青森県内における平安時代終末期の 竪穴住居跡の形態について

成田誠治

## 1 はじめに

青森県において平安時代の竪穴住居跡が発掘調査されたのは、昭和20年代からで、30年代には岩木山麓遺跡発掘調査や研究者による調査によって数が徐々に増える。48年からは、さらに調査数が増えるとともに以前より1遺跡の発掘面積が広くなり、より面的な調査が行われるようになる。時期も、ほぼ平安時代全期に及んでいる。

竪穴住居跡は、方形で内部に柱穴や壁下周溝を持ち、さらにカマドが構築されているものが基本的な形態である。しかし、同一集落内の竪穴住居跡においてカマドのないものや柱穴のないもの、あるいは壁下周溝のないもの、さらにはプランもくずれた方形のものが混在している。また、カマド形態や柱穴、壁下周溝形態に差違が見られることが明確になっている。

昭和51年に発掘調査された黒石市高館遺跡では、平安時代後期の竪穴住居跡が多数検出され、報告書ではその構造の諸要素について類別を試みている。しかし、その後この時期の資料がさらに増加したので、それらを比較検討してこの時期の竪穴住居構造を考察してみたい。

## 2 高館遺跡における竪穴住居跡の類別

昭和51年の発掘調査区域は、傾斜地であることと、畠地に造成する際削平されたために竪穴住居跡群の西側部分が不明瞭になっているものが多く見られた。このために報告書（1978年刊行）の類別は、推定によるところが多くみられる。しかし、この遺跡で多く検出された竪穴住居跡形態は、竪穴内部の柱穴が列を成していることであり、これがほかの遺跡と比較した場合特徴的な形態となっている。この特徴に着目して類別を試みている。

### （1）類別

報告書では、第Ⅰ群から第Ⅳ群まで分け、第Ⅰ群をA類・B類・C類に細分している。しかし再度検討し、ここでは次のように類別することとする。

第Ⅰ群 柱の列（柱列）を持つもの

A類 壁下に柱列を持つ

  A類a 内部に溝があるもの

  A類b 内部に溝がないもの

B類 壁から少し離れた所に柱列があるもの

  B類a 内部に溝があるもの

  B類b 内部に溝がないもの

C類 竪穴内に柱列が2列あるもの

  C類a 内部に溝があるもの

  C類b 内部に溝がないもの

第Ⅱ群 四隅とその中間に柱穴があるもの

第Ⅲ群 四隅に柱穴があるもの

第Ⅳ群 竪穴内に柱穴がないもの

## 第V群 壁下に溝があるもの

A類 溝内に柱列があるもの

B類 溝が堅穴内を巡るもの

以上のほかに堅穴外に長い煙道を持つカマドの痕跡のある堅穴住居跡が2軒検出されたが、ほかの遺構に切られてごく1部しか確認できなかったので、この稿では類別しないこととする。

## 3 類似の住居跡が検出された遺跡

## (1) 牡丹平南遺跡（黒石市）

昭和49年に東北縦貫自動車道建設区域内が発掘調査され、平安時代後期の堅穴住居跡が14軒検出された。これらの堅穴住居跡は、切り合がなく、しかもある一定の間隔を保って配置されているので、同時期に存在したものと考えられ、1つの集落を形成していたものと推定される。これらの堅穴住居跡は、堅穴内の柱穴や溝の有無・位置などによって類別すると第Ⅲ群と第Ⅳ群に分けられるものがある。多少柱穴の数や位置に違いはみられるが第V群A類とB類に類似するものもある。

第Ⅲ群に分けられる堅穴住居跡は、2軒あり、どちらもカマドが構築されている。規模は、第1号が $21.2\text{m}^2$ で第2号が $13\text{m}^2$ である。柱穴が四隅だけでなく、1個多く造られているものが第5号で規模が $22\text{m}^2$ である。これはこの遺跡のなかで4番目の大ささである。

第Ⅳ群に含まれるものは4軒あり、カマドが構築されているものが3軒、構築されていないものが1軒である。規模はカマドを持つ第11号が $4.4\text{m}^2$ 、第10号が $8.6\text{m}^2$ 、第4号が $11.9\text{m}^2$ で、この遺跡のなかで小さい規模のものである。カマドを持たないものは、第12号で規模が $13.6\text{m}^2$ とやや大きめである。

第V群A類にやや類似する堅穴住居跡は、第13号で壁下の溝は部分的に途切れており、1つの壁下溝には複数の柱穴がある。この住居跡の規模は、 $24.5\text{m}^2$ でこの遺跡のなかでは2番目である。第6号と第7号も第V群A類にやや類似している。

第1号は、規模が $30.8\text{m}^2$ でこの遺跡の中で最大のものであるが、壁下には周溝が巡り、その内側に4本の主柱穴を持ち、しっかりした造りである。昭和51年に発掘調査された青森市三内遺跡のH-44号住居跡は、焼失家屋で炭化した板の残存が良好で周溝の構能が良く解かる住居跡であるが、これも牡丹平南遺跡の第1号と同様な構造である。ともに第V群B類に分けられるものと考えられる。

## (2) 沖附(1)遺跡（六ヶ所村）

尾駒沼の南岸沿いの丘に立地する遺跡で、昭和59年に埋もれ切らないで窪みとして残存している堅穴とその周辺を発掘調査して、堅穴住居跡を37軒検出した。

堅穴住居跡群は、3ヶ所に分かれており、中央区では7軒、西区では22軒、東区では8軒検出された。規模が $30\text{m}^2$ 以上の住居跡は、西区には4軒あるが、中央区と東区にはない。中央区には規模が $20\text{m}^2$ 以上の住居跡が4軒あるが、東区では $20\text{m}^2$ 未満の住居跡である。

これらの住居跡群は溝の有無、柱穴の配列状況などで類別すると第Ⅳ群は、それぞれの区に1~2軒あり、第Ⅲ群は中央区と西区に1軒ずつある。第Ⅱ群に相当するものはない。

第V群A類に相当するものではなく、B類に相当するものは西区の第21号で周溝とその内側に4個の主柱穴がある。この第21号は、規模が $51.63\text{m}^2$ でこの遺跡のなかで最大の堅穴住居跡で、堅穴の外側にはカマドが構築されている壁以外の三方を土塁が巡っている。西区の第15号も構造は第21号に類似しているが、第Ⅲ群のように四隅にも柱穴がある。また、第17号と第27号では、周溝が巡り四隅に柱穴を有するが内側に主柱穴を持たないものもある。第16号は、周溝が巡って二隅に柱穴があり内部に主柱穴がない。第25号は、周溝があり柱穴が不規則で、主柱穴がない。第26号は、1部を除き壁下に溝が巡り、堅穴内部に2個の柱穴があり規模が $43.63\text{m}^2$ で、この遺跡のなかで2番目に大きいもので

ある。第19号と第33号は、カマドが構築されている壁を除いた三方の壁下に溝が巡っているもので、柱穴が検出されなかった竪穴住居跡である。

第23号は2方向の壁下に溝が検出され、その内側に複数の小ピットがあり、溝のない壁下にも小ピットが複数検出されている。規模は43.40m<sup>2</sup>でこの遺跡のなかでは3番目に大きい竪穴住居跡である。

このほかに、溝が断続的にあって所々に小ピットが検出されてい第2号、第4号、第13号、第24号、第32号、第35号のような例もみられている。また、溝がさらに部分的となっている第3号、第5号、第8号、第9号、第10号、第12号、第14号、第22号、第30号、第34号などの例もあり、これらは、小ピットが不規則にみられる竪穴住居跡で、それぞれの区から検出されている。

溝がなく小ピットが不規則に検出されたものは、第7号、第11号、第31号で、これらも各区に及んでいる。

以上のように、尾駒沼の中央部に突き出た部分に存在する西区の竪穴住居跡群が軒数も多く、規模の大きい住居跡があって、この地域の中心的なブロックと考えられている。形態的には、各ブロックとも相違するものを含んでおり、独立して存在するものではないと考えられる。そして高館遺跡で多数を占める第I群は、みられない。

### (3) 発茶沢遺跡（六ヶ所村）

鷹架沼の北岸に隣接する遺跡で、昭和54年・55年に発掘調査され、26軒の竪穴住居跡が検出された。

この遺跡で最大の規模を持つ竪穴住居跡は、第21号で約49m<sup>2</sup>である。その形態は、壁下に周溝が巡り四隅に小ピットがあって主柱穴が5個ある竪穴住居跡である。第1号は、主柱穴はないが、周溝と四隅の小ピットは第21号と同様である。これらは、第V群B類に含まれるものと思われる。これに類するものは、ほかに第2号、第3号、第4号、第12号、第13号、第18号、第23号などである。

第10号、第11号、第16号、第18号は、第V群A類と類似しているが、溝内の小ピットは列を成すほど多くはない。

柱穴が検出されない竪穴住居跡は、第5号、第7号、第15号、第19号、第20号で、これらは第IV群に類別できるものと考えられる。規模は、約6m<sup>2</sup>と約16m<sup>2</sup>のものである。

第6号、第14号、第24号、第25号は、部分的に溝が存在するもので、柱穴と思われる小ピットがあるものとないものがある。

第9号は、規模が約13.50m<sup>2</sup>で、竪穴内に壁に沿った状況でやや大きめのピットが5個検出されているが、これが柱穴だとすれば、この遺跡では新しい形態ではないかと思われる。

### (4) 大平遺跡（大鰐町）

昭和52年と53年に発掘調査され縄文時代と平安時代の集落跡であることが分かった。標高132.5mから137.5mの丘陵斜面に平安時代の竪穴住居跡が50軒検出された。これらの住居跡は、第II群、第III群、第IV群、第V群に類別できる。第II群、第III群、第IV群に分けられる竪穴住居跡は、規模の小さいものである。

この遺跡では、周溝を持つ竪穴住居跡が多く、また焼失家屋も多く炭化した板が周溝の近辺から出土している。周溝を持つものは、20軒で、部分的に溝を持つものも含めると29軒となる。これらは、第V群に含めることが出来る。

第V群A類に類別できるものでは、H-21号竪穴住居跡のように周溝内に複数の小ピット（柱穴）があり、竪穴の内側に5個の主柱穴を持つものがある。この住居跡は、遺跡中央部分にあり規模が54.97m<sup>2</sup>で、検出されたなかで最大のものである。H-34号は、規模が小さい（13.23m<sup>2</sup>）がH-21号と同様な形態である。周溝内に複数の小ピットがあり、主柱穴を持たないものでは、H-25号（15.94m<sup>2</sup>）がある。

第V群B類では、H-20号が規模が大きく51.54m<sup>2</sup>あり、5個の主柱穴を持っている。これと同類は、H-1号 (32.41m<sup>2</sup>)、H-35号 (約40m<sup>2</sup>)、H-44号 (41.10m<sup>2</sup>) である。

第V群B類に含まれるが、主柱穴を持っていないものは、H-12号 (20.98m<sup>2</sup>) H-15号 (6.74m<sup>2</sup>)、H-19号 (13.57m<sup>2</sup>)、H-23号 (21.33m<sup>2</sup>)、H-28号 (18.34m<sup>2</sup>)、H-32号 (6.92m<sup>2</sup>)、H-33号 (17.92m<sup>2</sup>)、H-36号 (12.56m<sup>2</sup>)、H-46号 (7.19m<sup>2</sup>) である。このうち四隅に小ピット（柱穴）を持つものは、H-15号とH-28号である。

部分的に溝を持つものはH-41号 (19.80m<sup>2</sup>) で、溝を持たない壁に沿って複数の柱穴と思われる小ピットがあり、さらに溝内にも複数の柱穴があるものである。これは第I群A類aに類別できる。

#### （5）古館遺跡（碇ヶ跡村）

昭和52年と53年に発掘調査され、平安時代から中世にかけての遺構が多数検出された。発掘調査した区域は 館跡の1つの郭全域に及び遺構の切合が激しく柱穴の所属が明確にできなかった遺構もある。報告書（1980年刊行）によって類別すると次のようになるものと考えられる。

##### ア. カマドを有する遺構

第I群A類a : 7H

b : 35H、43H、46AH、51H

B類b : 4H、63H、65H

##### イ. カマドのない遺構

第I群A類a : 108

b : 42H、128H、47H

B類b : 16H

C類a : 103H

b : 1H

##### ウ. 高館と古館の第I群の比較

B類aは、古館ではみられず高館でも類例は少ない。切合関係では、A類bに切られC類bを切っている。このタイプは、他の遺跡でも現在のところ類例がみられず今後の研究課題であるが、高館ではC類bより新しくA類bより古いという時間的差違がみられる。

第I群のなかでA類bが他のタイプを切っているのでもっとも新しいタイプである。また、A類bのなかでも重複があり、短期間に消えるタイプではないようである。さらにこのタイプは、高館と古館のどちらにおいてもカマドを持つものと持たないものが検出されているが、これらが検出された地点は、別々であり同時併存の可能性もある。

カマドを持つものは、日常的に生活する所であり、カマドを持たないものは常時居ない建物あるいは何かを収納する建物という機能が考えられる。ただ、カマドを持つものでも工房的な機能を持つものではないかと考えられるものも見られる。

B類bは、高館では切合って検出された54Hと55Hだけで、どちらもカマドは検出されていない。しかし、54Hは、壁から離れたところにある柱列のほかに、その内側に4本の主柱穴が存在したような痕跡もみられる。また、55Hに切られている南壁にカマドが構築されていた可能性も考えられる。古館では、このようなタイプにカマドを持つものと持たないものがある。カマドを持つものでは、カマドが構築されている壁の柱列は、壁下あるいは壁に非常に近い所にある。カマドを持たないものも一方の壁下に柱列がみられる。

C類aは、2列の柱列と一方に溝を持つものであるが、溝の中に柱穴が並ぶタイプである。高館の82Hは、カマドを持つ住居跡であるが、壁下柱列の内側に溝があり、溝の中に柱穴が並んでいる。83Hは、

カマドを確認できなかったものであるが、柱穴の並びと溝の状況は類似するものである。

C類bは、高館ではカマドを持つ44Hのほか、カマドが検出されていない4Hと74Hがこのタイプである。古館では、豎穴を伴わない1Hの柱穴の並びがこのタイプに含まれる。

A類aは、高館の104H、103H、115H、56Hがこれに含まれる。この中でカマドが確認されているものが104Hである。56Hは、東壁直下に溝があり、南壁と北壁に柱列があり、西壁は55Hに切られているため不明である。このタイプでは、部分的に溝が認められるもので、古館の7Hも含めることができる。

#### (6) 大館森山遺跡（鰺ヶ沢町）

標高165mの独立丘陵に立地し、埋もり切らない豎穴が約30基確認され、岩木山麓遺跡発掘調査の一環として昭和35年に発掘調査された。この調査では、3軒の豎穴住居跡と丘陵を巡る2重の溝跡を確認している。

1号住居跡は、部分的な溝と溝に沿った柱穴の列及び溝のない壁下にも柱穴が並ぶタイプで第I群A類aに類別できるものである。

2号と4号住居跡は、同タイプで2列の柱穴の列が並ぶ部分がみられ第I群C類bに類別できるものである。この遺跡で検出された住居跡には、いずれも煙道の短いカマドが構築されている。規模とプランは、1号が5.5×7.5mの長方形、2号が南北7m・東西6.5mでほぼ方形プラン、4号が1辺8~8.2mでやや不整な方形プランである。

#### (7) 福島城鯨崎豎穴（市浦村）

福島城域内の鯨崎にある埋もり切らない豎穴群である。昭和30年に東北北部の館跡調査の一環として発掘調査された。この時に豎穴は、32基確認され、そのうち4基発掘された。調査の結果2基は井戸跡で、2基が豎穴住居跡であった。第1号住居跡は、壁下に柱穴の列が検出されカマドが構築され、豎穴外にはカマドのある壁以外の壁を土塁が巡っているものである。この住居跡の豎穴内部の構造は、第I群A類bに類別できる。

#### (8) 永野遺跡（碇ヶ関村）

標高185m~190mの平坦な丘陵上にあって、昭和52年と53年に発掘調査された。調査の結果、縄文時代、平安時代、中世の複合遺跡であることが分かった。平安時代の豎穴住居跡は、24軒検出されたが、不明瞭になっているものが3軒ある。

沖附（1）・発茶沢・大平遺跡と同様に周溝を持つ豎穴住居跡が多く、14軒もある。周溝を持たないもので注目すべき住居跡は、第18号でカマドを持ち壁下に柱穴が多数並ぶものである。これは、第I群A類bに類別されるものである。第15号は、規模が48.67m<sup>2</sup>でカマドを持ち、壁下に溝がなく複数の柱穴が並び、その内側に4個の柱穴がある住居跡である。この第15号も第I群A類bに類別される。

第1号・第7号・第11号・第17号は、周溝内に小ピット（柱穴）が多数並んでおり、第I群A類aに類別できる。

#### (9) 独孤遺跡（弘前市）

この遺跡は、農道建設のため昭和58・59年に発掘調査された。調査の結果、縄文土器も若干出土したが、多数を占める遺物・遺構は、平安時代のものである。

第203号豎穴遺構は、拡張された痕跡か、あるいは掘立建物跡との重複のためか、柱穴が豎穴内部にも多数検出されている。壁下には、壁に沿って柱穴が並んでおり第I群A類bに類別できる。

#### (10) 杉の沢遺跡（浪岡町）

標高約60mの丘陵地とその斜面に立地している。昭和52年に斜面が発掘調査され、縄文時代・弥生時代・平安時代・中世・近世の複合遺跡であることが分かった。

平安時代の竪穴住居跡は9軒検出されているが、周溝を持つものが多くみられた。周溝を持たないものは少しであるが、第1号は、南壁にカマドが構築され、北壁と西壁の壁に沿って小ピット（柱穴）が多数並んで検出された。第I群A類bに類別されるもので、ほかの住居跡とは形態が異なっている。

#### (11) 鳥海山遺跡（平賀町）

遺跡は標高60～70mで、三方が小高い丘陵に囲まれた場所にあって、昭和50年に発掘調査された。調査の結果、平安時代の竪穴住居跡53軒、小竪穴遺構や鍛冶遺構及び溝跡などが検出され、集落遺跡であることが分かった。

竪穴住居跡は、周溝のあるものが多数を占め、周溝のないものは少ない。最大の規模のものは第19号で、約84m<sup>2</sup>あり主柱穴が2個とそれに対応する小ピットが2個竪穴内部にある。壁下には、溝が巡り、四隅に柱穴があって溝内にも複数の小ピットがある。

溝内に多数のピットが検出されたものには、第2号（約42m<sup>2</sup>）があり第V群A類に類別される。壁下には小ピット（柱穴）が多数検出されたものは、第17号（約25m<sup>2</sup>）で、これは第I群A類bに類別できるものである。

#### (12) 山本遺跡（浪岡町）

遺跡は、標高約30mの平垣地に所在し、その東端部分が昭和59年と60年に発掘調査された。調査の結果、平安時代の竪穴住居跡や土坑・溝・鍛冶関係遺構などが検出された。

竪穴住居跡は、22軒検出されたが、壁下に周溝のあるものが多くみられる。この周溝のあるものでも溝内に複数の柱穴を持つものもある。

壁下に周溝を持たないもののなかに、第33号と第9号のように壁下に複数の柱穴を持つものである。第I群A類bに類別できるものであるが、柱穴は方形で太いものである。

#### (13) 羽黒平遺跡（浪岡町）

遺跡は丘陵地の末端部にあり、その1部が昭和52年に発掘調査された。その結果、平安時代の竪穴住居跡68軒や鍛冶関係遺構などが検出された。

竪穴住居跡は、周溝を持つものが多く検出されているが、溝内及び溝の近辺に複数の柱穴を持つものも少数検出されている。また、周溝がなく、壁下に柱穴が列を成しているものも検出されている。

第10号は、四隅に柱穴を持ちさらにその間に5個ずつの長方形を呈する柱穴が配されている。また、竪穴内側に4個の主柱穴を持っている。第I群A類bに類別されるものである。柱穴の数は少ないが、第36号もこのタイプである。また、上面が削平されているため部分的に検出された第57号Bもこのタイプとみられる。

第34号Aは、北陸の東寄り部分から東壁と南壁の東寄り部分にかけて、壁下に溝を持ちそのなかに柱穴が検出されている。西壁と、南壁の西寄り部分には、溝がなく、壁下に柱穴が検出されている。第I群A類のaとbがミックスしたような形態である。この住居跡は、周溝を持つ第34号Bを削り、貼り床して構築されている。その新旧関係は、周溝を持つ竪穴住居跡が古く、柱列を持つものが新しいということを示している。

#### (14) 蓬田大館遺跡（蓬田村）

この遺跡は、中世の館跡として知られているものであるが、昭和59年・60年・61年に発掘調査され、中世の遺物・遺構のほかに、平安時代の遺物・遺構も検出された。

平安時代の竪穴住居跡では、周溝を持つものが多く検出されているが、第I群に類別できる住居跡も検出されている。

第3号住居跡は、全体を知り得る状況で検出されているが、カマドは構築されていない。やや南北に長い長方形プランである。第8号住居跡は、全面が検出されず、1/3ほど発掘調査されたものである。

これら第3号・第8号は、住穴の配列から第I群A類bに分けられる。これらの床面からは、擦文土器が出土している。

#### 4 壺穴住居構造の変遷

##### (1) 壺穴住居と集落

平安時代後半期の集落において壺穴部の壁下に周溝が巡り、その内側にしっかりした主柱穴が構築されている壺穴住居跡は、ごく少数である。このような住居跡は沖附(1)遺跡では第21号、牡丹平南遺跡では第8号、発茶沢遺跡では第21号であり、その集落内で規模が最大である。このような住居跡は、集落内で中心的な地位を担っている者の家屋ではないかと考えられる。

大平遺跡では、周溝としっかりした柱穴を持っている住居跡が8軒ありこのなかにはH-29号のように小規模のものも含まれているが、ほかの7軒は30m<sup>2</sup>以上の規模を持つものである。この遺跡では、最大の規模を持つ住居跡であるH-21号に注目したい。この住居跡は、壺穴の内側に大きな柱穴を持つほかに四隅にも柱穴があり、さらに周溝内にも小ピット(柱穴)を持つタイプである。沖附(1)遺跡や牡丹平南遺跡や発茶沢遺跡でもこのようなタイプはみられるが、トップクラスの住居跡ではない。大平遺跡のH-21号では、壺穴住居の上屋構造に新しい要素が加わったもので、このような新しいタイプの住居が集落内でのトップに及ぶということは、建築技術の移入というだけでなく、集団的移住によるものではないかと考えられる。

永野遺跡では、トップクラスの住居跡がほとんど新しいタイプである。さらに壁下に柱列を持つ住居跡がナンバー2に入り込んでいる。さらに、浪岡町に所在する山本遺跡や羽黒平遺跡では、柱列を成す柱穴の形状が方形や長方形を呈するようになりさらに新しい要素が加わってくる。

高館遺跡と古館遺跡は、中世の館跡であり、また平安時代にあってもその地形的要素から軍事的集落で、一般集落とかなり性格が異なるものであり、いち早く新しいタイプの壺穴住居(第I群)が入り込む可能性が高いものといえる。このことは住居構造だけでなく、遺物においても、関東地方に多くみられる羽釜や舶来陶磁器破片が住居跡内から出土していることでも理解できるものである。

大館森山遺跡は、要塞的な性格の集落であり、福島城鯨崎壺穴群は十三湊に臨む場所で交易の要衝に立地している。これら遺跡も他地域からの生活様式が入り込む条件を充分備えている。

また、蓬田大館遺跡において第I群に類別される住居跡床面から擦文土器が出土していることは、今後さらに検討すべき課題である。

##### (2) 年代

年代の推定は、住居跡内から出土した遺物によってなされているが、もう1つの方法として、陶磁器の製作年代によってもおおよその推定はできる。

沖附(1)遺跡の第34号壺穴住居跡覆土から出土した灰釉陶器は、折戸53号様式で10世紀前半に製作されたものと推定されている。床面からの出土ではないので、この住居跡が廃絶した後に灰釉陶器が入り込んだものであり、住居跡は10世紀前半には使用されなくなっていたものと考えられる。出土した灰釉陶器破片は、硯として再利用されている痕跡があることから第34号壺穴住居跡が使用されなくなつてからも、この集落が存続していたと考えられる。この遺跡で最大の規模を持つ第21号壺穴住居跡の壺穴部の外側に土壘が巡っているが、この土壘が構築される前の地表面に10世紀前半に降下した白頭山火山灰が検出された。このためこの住居跡はほぼ10世紀前半期に構築され、カマドの造り替えも行っているのでかなりの期間使用されていたものと考えられる。

高館遺跡では、第20号壺穴住居跡のカマドに付随するピット底面から出土した青白磁小皿破片が年代を推定する資料として重要である。この小皿は影青いんちゃんと呼ばれ、11世紀から12世紀前半に中国で製作

されたものであると推定されている。浪岡町史編纂室の工藤清泰氏によると、この小皿は、口縁形態は平泉出土のものと同じであるが、平泉出土のものは厚ぼったいのに対して高館遺跡出土のものは薄くて非常に良く作られた製品であるという。このような良質のものは、出土例が少なく、高館にもたらされた経緯については、現在のところ知り得ない。このように脈絡がなく、他地域の物が入り込むことと、新タイプの竪穴住居跡が主体となる遺跡が出現することが符合しているようにも考えられる。ここでは、仮説として柱列を持つ竪穴住居跡・この稿では第Ⅰ群として分類したものは、10世紀後半あたりに本県内に出現し、11世紀から12世紀にかけて主体とする遺跡が増えてくるというようにとらえておきたい。

## 5 おわりに

平安時代の竪穴住居は、形態こそ異なるが縄文時代からの伝統を引くもので、日本列島内では非常に長い間、人々の居住形態であった。八戸工業大学の高島成侑教授によると、近世の庄屋でも竪穴住居であったことが知られているという。中世には竪穴形態の建築物は、工房あるいは収納庫に限られていると考えていたが、振り返ってみると調査されている場所は、館跡など特別な集落が多いことに気付く。居住形態の変遷は、まだまだ研究課題が多い。特に平安時代から中世にかけての東北北部の状況は複雑であり、北方との関わり合いと南方からの急激な文化の浸透が居住形態にも直接的に反映している。

土師器や須恵器についてもその形態的な比較を行うことは重要であり、今後各集落ごとに比較研究することが必要とされる。

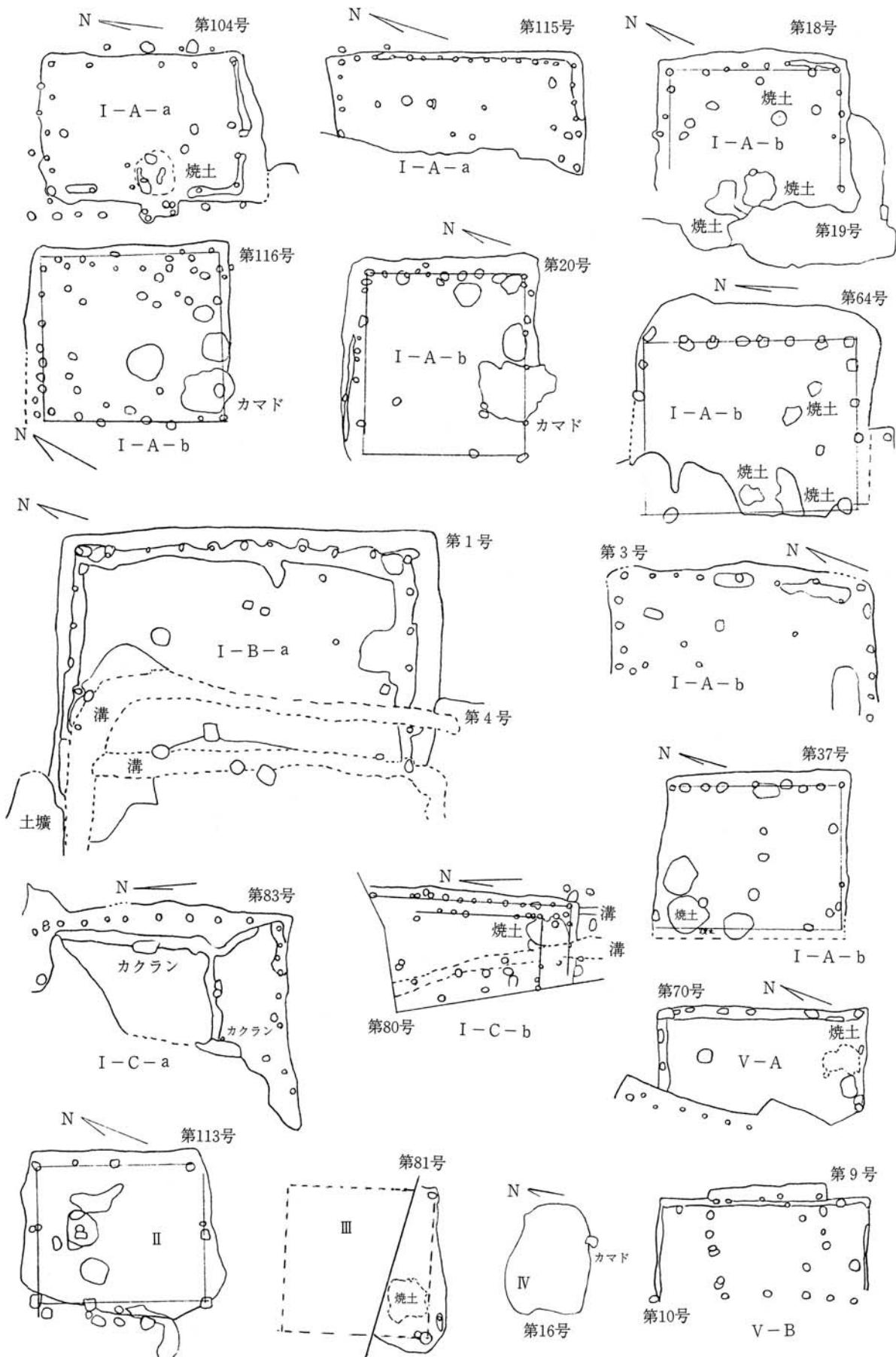
高館遺跡や古館遺跡が発掘調査されてから壁下に柱列を持つ竪穴住居について注目はされていたが、同様な遺跡が発掘調査されないため研究は休止状態であった。近年浪岡町の高屋敷館跡が発掘調査され、土壘と堀に囲まれた集落は、全国的に注目されることとなった。この遺跡と同様の居住構造を持つ高館遺跡の居住跡分類を補足する必要性が強くなつたため、まとめてみた。再考してみて、さらにこの時期について研究を進める必要性を強く感じた。

最後に、この稿をまとめるにあたり御教示を頂いた八戸工業大学教授高島成侑氏、浪岡町史編纂室主査工藤清泰氏に対して感謝致します。

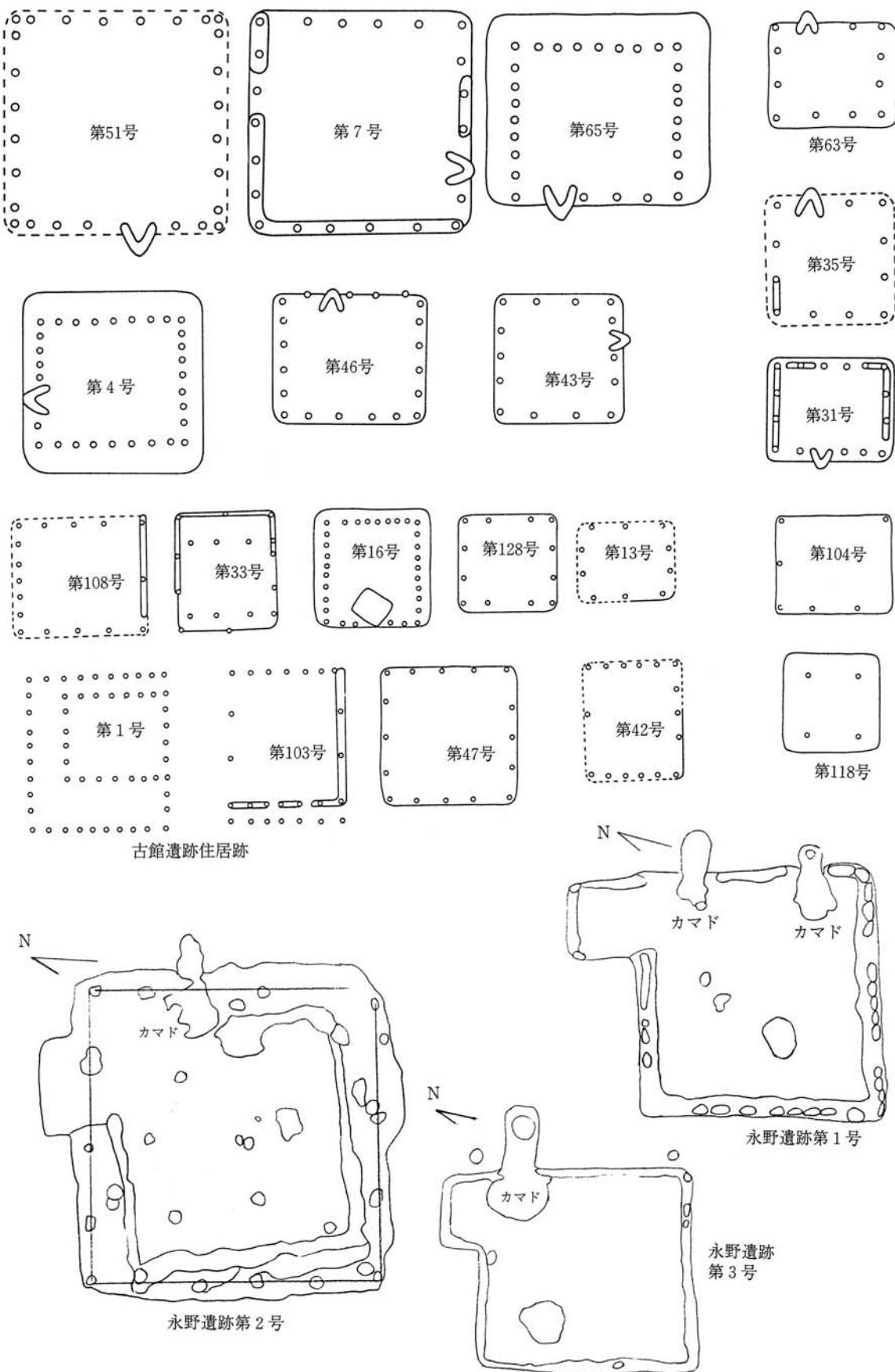
## 参考文献

- 西村正衛・桜井清彦・玉口時雄 1952 「青森県森田村附近の遺跡調査報告」『古代』第5号  
 江坂輝彌 1953 「尻屋崎付近の土師器、須恵器出土の貝塚」日本考古学協会第11回総会研究発表要旨  
 江坂輝彌 1953 「青森県下北半島稻荷遺跡調査報告」『古代12号』  
 西村正衛・桜井清彦 1953 「青森県十三村中島発見の土師器」『考古学雑誌』40巻1号  
 桜井清彦 1955 「青森県相内村赤坂遺跡について」『古代17号』  
 桜井清彦 1956 「青森県森田村発見の鉄斧」『貝塚』第51号  
 斎藤 忠 1956 「蝦夷の文化とアイヌの文化」『蝦夷』  
 桜井清彦 1957 「青森県西津軽八重菊竪穴住居址（第2次）」『日本考古学年報』  
 桜井清彦 1985 「青森県市浦村岩井遺跡」『日本考古学年報』7  
 桜井清彦 1985 「青森県市浦村赤坂遺跡」『日本考古学年報』7  
 江上波夫・関野雄・桜井清彦 1958 「青森県北津軽郡市浦村相内福島城址」『館址』所収  
 桜井清彦 1958 「東北地方北部の土師器と竪穴に関する諸問題」『館址』所収  
 江坂輝彌 1958 「先史時代における奥羽地方北部と北海道地方の文化交流の研究」『民俗学研究』第26巻第1号  
 橋 善光 1965 「下北半島の歴史考古学」『東奥文化』第30号  
 音喜多富寿 1965 「八戸市新田市子林遺跡調査報告書」八戸市教育委員会  
 平山久夫 1967 「津軽平野における土師器の低地遺跡」『考古学ジャーナル』No13  
 橋 善光 1967 「下北半島尻屋大平貝塚－本州東北端部における歴史時代漁労集落」『考古学ジャーナル』No15  
 斎藤 忠・岩崎卓也 1968 「大館森山遺跡」『岩木山』所収

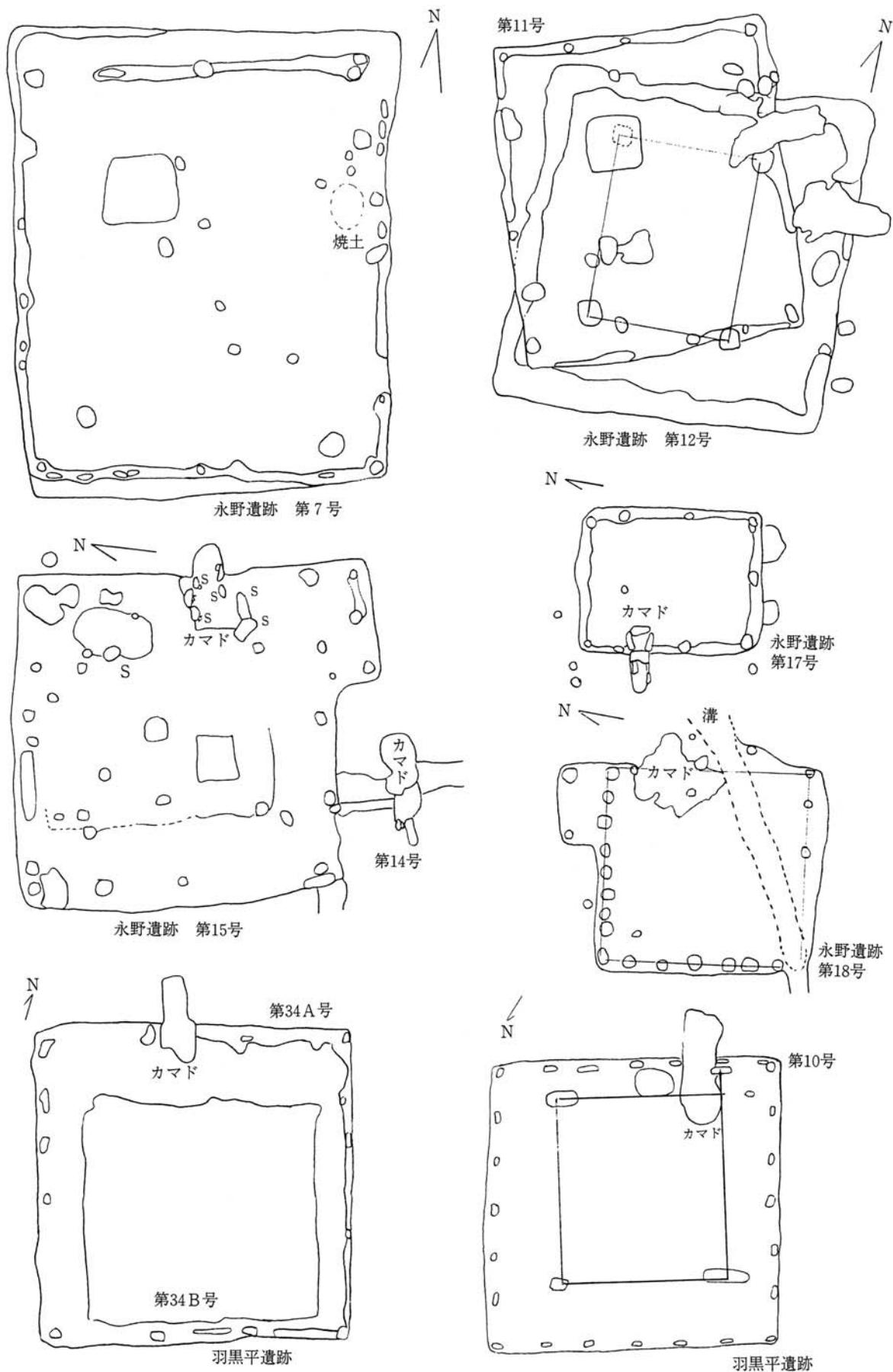
- 渡辺兼庸 1968 「常盤野遺跡」『岩木山』所収  
村越 潔 1968 「浮橋貝塚」『岩木山』所収  
村越 潔 1968 「外馬屋遺跡」『岩木山』所収  
村越 潔 1968 「若山遺跡」『岩木山』所収  
平山久夫 1968 「津軽平野の土師器低地遺跡について」『うとう』第70号  
村越 潔 1968 「津軽地方の考古学」『うとう』第70号  
江坂輝彌 1968 「青森県の東部と西部」『うとう』第70号  
岡本 勇 1968 「青森県六ヶ所村平沼字追館遺跡」『日本考古学年報』16  
桜井清彦 1968 「東北地方の擦文文化について」『北奥古代文化』創刊号  
坂詰秀一 1968 「前田野目窯跡調査概要」五所川原市教育委員会  
坂詰秀一 1968 「北限の恵須器窯跡」『考古学ジャーナル』No21  
桜井清彦・菊池徹夫編 1987 『蓬田大館遺跡』  
青森県教育委員会 1975 『富山遺跡・永泉寺跡発掘調査報告書』  
青森県教育委員会 1975 『近野遺跡発掘調査報告書(1)』  
青森県教育委員会 1976 『黒石市牡丹平南遺跡・浅瀬石遺跡発掘調査報告書』  
青森県教育委員会 1977 『鳥海山遺跡発掘調査報告書』  
青森県教育委員会 1977 『青森市三内遺跡』  
青森県教育委員会 1977 『源常平遺跡発掘調査報告書』  
青森県教育委員会 1977 『黒石市高館遺跡発掘調査報告書』  
青森県教育委員会 1979 『羽黒平遺跡』  
青森県教育委員会 1979 『杉の沢遺跡』  
青森県教育委員会 1979 『松元遺跡発掘調査報告書』  
青森県教育委員会 1979 『近野遺跡』  
青森県教育委員会 1980 『大鰐町砂沢平遺跡』  
青森県教育委員会 1980 『碇ヶ関村古館遺跡』  
青森県教育委員会 1980 『永野遺跡発掘調査報告書』  
青森県教育委員会 1980 『板留(2)遺跡発掘調査報告書』  
青森県教育委員会 1981 『野辺地町明前遺跡』  
青森県教育委員会 1982 『発茶沢遺跡』  
青森県教育委員会 1983 『鶴窪遺跡』  
青森県教育委員会 1984 『朝日山遺跡』  
青森県教育委員会 1985 『表館遺跡II』  
青森県教育委員会 1985 『壳場遺跡発掘調査報告書・大タルミ遺跡発掘調査報告書』  
青森県教育委員会 1986 『沖附(1)遺跡』  
青森県教育委員会 1987 『山本遺跡』  
青森県教育委員会 1988 『小田内沼(1)遺跡』  
青森県教育委員会 1988 『李平下安原遺跡』  
青森県教育委員会 1988 『発茶沢(1)遺跡』  
青森県教育委員会 1989 『表館(1)遺跡III・『発茶沢(1)遺跡IV』  
青森県教育委員会 1990 『李沢遺跡』  
青森県教育委員会 1991 『中野平遺跡・向山遺跡』  
青森県教育委員会 1994 『山元(3)遺跡』  
青森県教育委員会 1994 『久米川遺跡』  
青森県教育委員会 1995 『山元(2)遺跡』  
青森県教育委員会 1995 『野尻(2)遺跡』  
青森県教育委員会 1996 『野尻(2)・(3)・(4)遺跡』



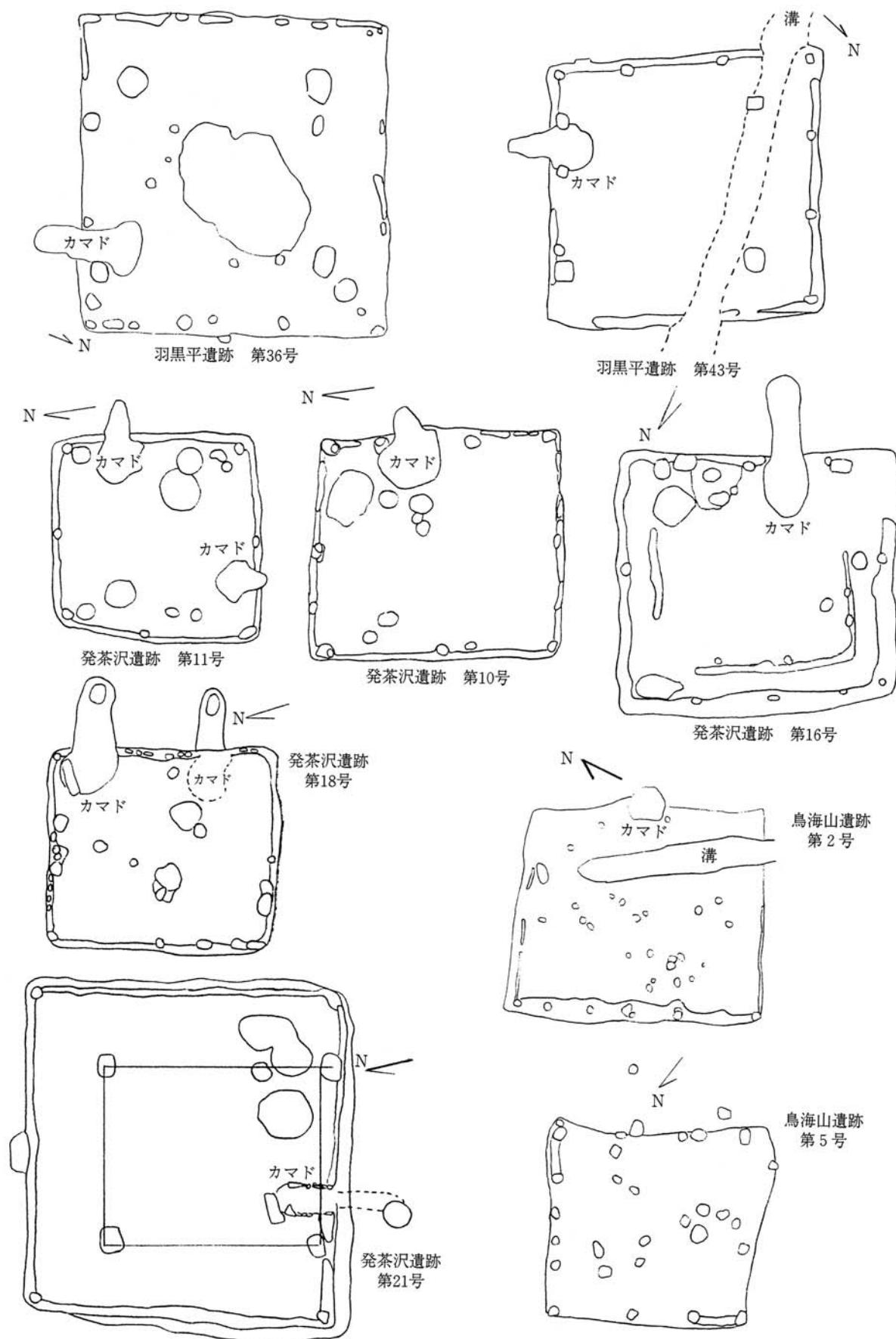
第1図 高館遺跡竪穴住居跡分類模式図

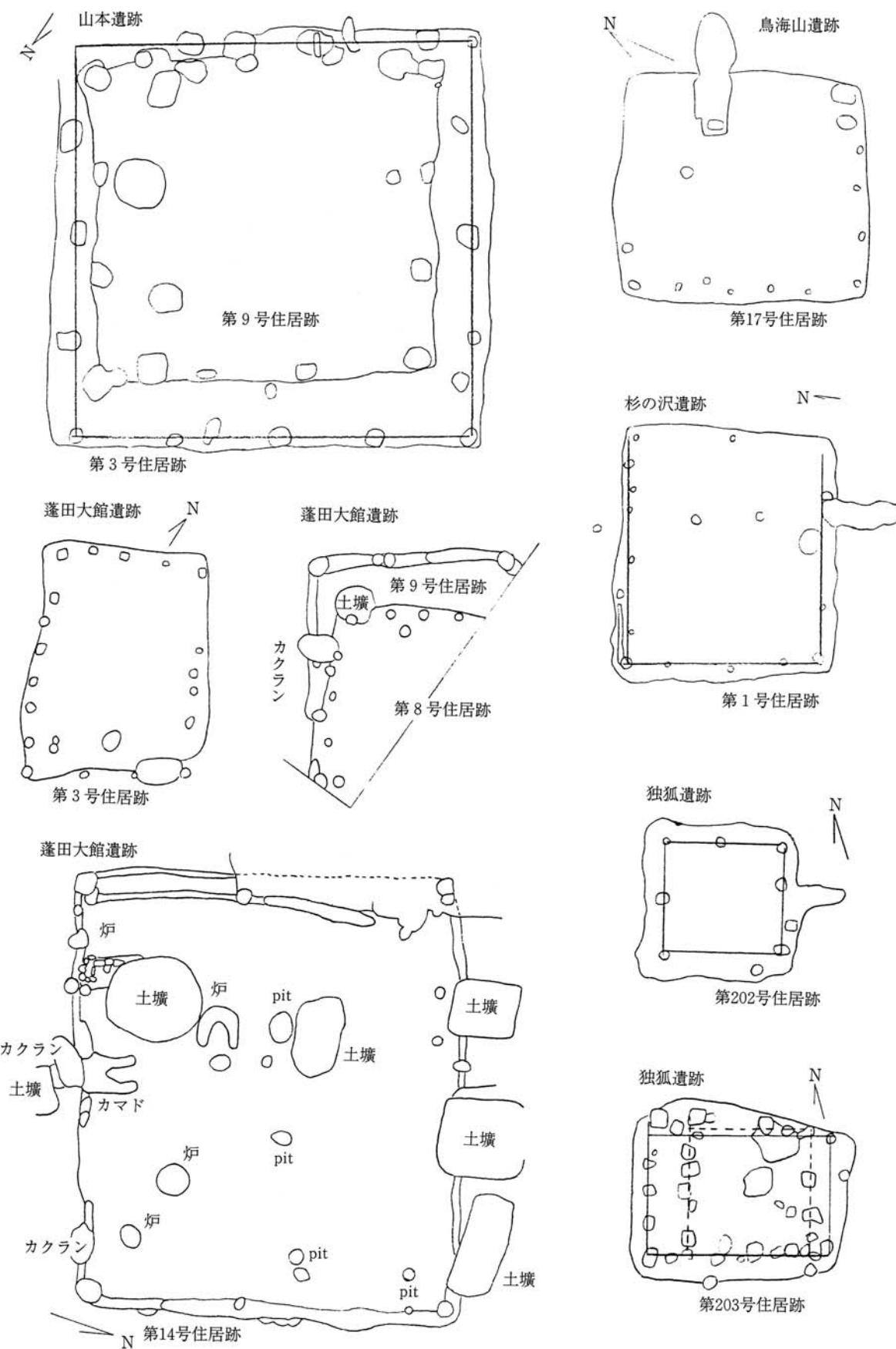


第2図 古館・永野遺跡住居跡模式図



第3図 永野・羽黒平遺跡竪穴住居跡模式図

第4図 羽黒平・発茶沢・鳥海山遺跡  
竪穴住居跡模式図



第5図 山本・鳥海山・杉の沢・蓬田大館・独狐  
遺跡の遺構模式図